

## 生物多様性の保全に関する研究会 公開講座 開催報告

【開催日】 2017年3月8日（水） 13:00～16:00

【会場】 たましん RISURU ホール（立川市錦町 3-3-20）

【参加者数】 28名（23自治体）

### 【プログラム】

1. 開会・主催者あいさつ
2. 基調講演 1  
「地域の植物の多様性を決めるものは何か」  
星野義延氏（東京農工大学名誉教授）
3. 基調講演 2  
「綾町の町づくりと生物多様性地域戦略」  
河野耕三氏  
（宮崎県綾町役場 ユネスコエコパーク推進室 照葉樹林文化推進専門監）
4. 「生物多様性の保全に関する研究会」グループ研究成果発表
5. 閉会



講演の様子



グループ研究成果発表の講評

## 【基調講演 1】

「地域の植物の多様性を決めるものは何か」

星野義延氏（東京農工大学教授）

<はじめに>

- ・ 地域の生物多様性保全で一番大切なことは地域に昔からある自然をできるだけ良好な状態で残していくことである。地域の植物の多さが、何で決まっているのかについては、地球スケールでは、温度が高く、水の多いところでは植物も動物も種類が多く、植物の生産量が地域の生きものの数を決めている。また、スケールに限らず、面積が広くなると種数が多くなる。
- ・ 生物多様性には、3つの階層がある。すなわち、①個体ごとに異なる遺伝情報を持っているという遺伝的多様性、②ある地域や生態系に生きものの種がどれだけいるかという種多様性、③「森林」や「草原」といった生態系（群集）が地域にどのくらいあるかという生態系の多様性である。今日の話は、植物の種多様性と生態系の多様性との関係についてである。

<植物の種多様性と植物群落の多様性>

- ・ 府中市には植物が 1,133 種生息する。そのうち東京都のレッドリストに登録されている種類は 71 種、植物群落は 125 のタイプがある。
- ・ 種の多様性は、① $\alpha$ 多様性（群落内の多様性）、② $\beta$ 多様性（群落間の多様性）、③ $\gamma$ 多様性（地域内の多様性）の 3 つに分けられ、府中市内の植物の種数は $\gamma$ 多様性にあたる。

<丘陵地の植物と植物群落の多様性>

- ・ 私の研究室では、丘陵地の里山的な環境が残っている場所で種の多様性と群落の多様

性の関係を調べた。目的は 2 つあり、「植物の種数と群落の多様性の関係を明らかにすること」と「水田耕作の有無による出現種数と群落の多様性の違いから農的管理の影響を明らかにすること」である。

- ・ 丘陵地の小集水域（谷戸）を景観の単位として使用し、尾根で囲まれた範囲を調査地とした。調査地の大きさは様々であり、以下の 2 つの地域に設けた。①町田市図師小野路（以下、「町田」という。）が 13 谷戸、②栃木県茂木町所草（以下、「茂木」という。）が 14 谷戸。
- ・ 調査ではフロラ調査（どのような植物が生育しているのかを調べる）を行い、植物群落がどのような植物で構成されているかを調べた。その結果から植生図を作り、それぞれの植物群落がどのくらいの面積を占めているかを調べた。（フロラ調査は環境アセスメント等で普通に使われる調査方法である。）
- ・ 調査の結果、①町田では 45 群落、②茂木では 53 群落が確認された。町田と茂木ともに、1 つの谷戸で約 300 種の植物が確認された。調査地の面積は平均 3ha であり、群落あたりの種の多様度は町田の方が少し高かった。谷戸の面積と種数との間に相関関係はみられなかったが、群落の数と種数との間に相関があった。また、水田耕作の有無で比較すると、群落の数は耕作している方が多く、耕作水田のある集水域では、植物種数、群落数ともに多くなっていた。
- ・ ある種が、いくつの谷戸に出現するのかをまとめた結果、1 つの谷戸で見られるものや、複数の谷戸で見られるものまで様々であった。また、いくつの群落に出現したかでは、1 つの群落にしか出現しない種が最も多く、限られた植物群落でしか見られない種が多かった。これは、群落の数と種数

との間に相関があったことと関連している。

#### <都市のつる植物について調べた例>

- ・ つる植物は街中でもしたたかに生えている。日本ではヤブガラシ等、草本植物が多い。
- ・ 東京都内の13箇所です一定面積(500m×500m)の方形区を16に区分して、出現したつる植物を記録し、種多様性と土地利用の関係を調べた。1地点の出現種は9~37種であり、合計は50種であった。ほとんどが在来植物であった。種の多さを説明するものは土地利用の複雑さであった。

#### <伊豆諸島の種と植物群落>

- ・ 種と植物群落の関係を島単位で考えた。伊豆諸島の大島から神津島まで調べた結果、島の面積と植物の種数には相関関係がみられ、島の面積と群落数にも相関関係がみられた。種数と群落数との間には、強い相関があった。これは丘陵地の谷戸ごとの結果と同様であった。

#### <地域の植物の多様性を決めるもの>

- ・ 植物の多様性は面積と関係がある。同面積の場合、『立地(生きものの生育する場所)』=『環境』の多様さが種数を決めており、丘陵地の例のように群落ごとに構成種が大きく違う場合、 $\beta$ 多様性が高い。
- ・ 植生図といった地域の植物群落の分布状況(環境省の植生図は2万5000分の1)を、地域の生物多様性の基礎情報として地域戦略づくりに役立ててもらいたい。

#### <市民調査による植物の記録>

- ・ 多くの自治体で、多様性についての基礎情報がなくて困っていると聞いている。府中市では1970年頃に自然調査団を組織し、生きものリストを作成した。「府中の植物を記

録する会」の市民調査(月1回程度)により、植物の状況を調べてきた。

- ・ 植生については、『府中市の植生』という出版物がある。東京農工大学の私の先々代教授・奥富清先生が1975年に作った。また、2014年には吉川正人先生を中心に、改めて『府中市の植生』を作っており、その副題は「地域の自然環境と生物多様性保全に向けて」である。

#### <おわりに>

- ・ 市民との調査結果と学生の調査結果により、府中市における植物の多様性の変化を調べた。1970年代は900種だったが、我々の調査では1,133種あり、増えたのは新しく見つかった国外外来種であった。一方で消えてしまった在来種があり、それと同じくらい新しく出てきた在来種がある。
- ・ 「府中の植物を記録する会」では、町丁目単位でデータを集めている。都や国のレッドリスト掲載種数の分布を調べたところ、多摩川沿いの低地、田んぼが残っているようなところでは絶滅危惧種が多い。それから、浅間山、東京農工大、多摩霊園といった大規模緑地でレッドリスト種が多い。逆に市街化された台地上は外来種が多く、レッドリスト種の無い地域が多い。

#### <質疑応答>

- Q. : 市民の方と10年ほど調査されているとのことだが、植物を見分けるのは大変ではないか。どういう市民の方が中心になって、どういう教育をされているのか。研究者と行政の連携はどのようにされているのか。
- A. : 府中には環境に関わる市民グループがあり、市の緑の基本計画を立てるときに、そのような市民の方と一緒に活動した。計画作成に必要な基礎データが無く、行政も予算が

ないため、手弁当で一緒に植物の観察をしませんか、と呼びかけたら 10 人ぐらい来た。メンバーは入れ替わっているが、東京農工大の学生、環境工科専門学校の学生等と一緒に進めてきた。月 1 回くらい定期的に一緒に行き、他にも植物に詳しい人がいるため、一緒に観察することで植物を覚えていく。1~2 年で普通に生えている植物では驚かないくらいに詳しくなる。最近では野鳥観察をされている方が植物の観察をするようになる傾向がある。また、「河原の植物を観察する会」という市民グループは府中市から観察会等を委託されている。私個人はその会の講師を引き受けるなどしているが、直接行政と連携しているわけではない。

## 【基調講演 2】

「綾町の町づくりと生物多様性地域戦略」

河野耕三氏（綾町役場ユネスコエコパーク推進室照葉樹林文化推進専門監）

### <綾町の概要>

- ・綾町は宮崎市から車で 30 分くらいの場所にあり、9,500ha で森林が 80%ほどを占める。人口 7,226 人で 1965 年頃から 50 年ほど総数の変化はないが、年齢構成は変化し、高齢化が進んでいる。ただし、移住者が少し増えている。また、子連れの世帯が増えたため小学生が少し増えている。
- ・二つの川が出合ったところ、半径 2 km くらいの範囲に人が住んでおり、コンパクトシティの典型的なところといえる。有機農業の中心地は錦原の台地上にあるが、居住地や水田が集中する地域はかつて氾濫原だった。昔は貧しい町だった。
- ・交通機関も公共バスしかなく、タクシーも数台しかない。通常は自家用車での移動であり、病院も少なく、小中学校は 1 つのみである。とはいえ、狭い範囲にまとまって人が住んでいるのでインフラ費用は最小限で済み、効率的といえる。
- ・目指すべきまちの姿として、前町長の郷田氏は「絶対に合併をしない。合併は町の経済や文化を減ぼす」と考えていた。
- ・吊り橋の正面の森林伐採問題が発端となり、町民と郷田氏の対立、そこから生まれた森の価値認識から綾町の地域づくりが始まった。
- ・綾の自然は一年中薄暗いためヤマビルやマムシが多く、地形も陰しいため、散策を楽しむルートはない。そういう自然しかない森を伐るとなったとき住民は喜んだが、郷田氏は反対した。

## <綾町の地域づくりの歴史>

### ① 概要

- ・ 1930年代から1940年代の初めまでの数年間、綾町の森林は九州森林管理局の管轄で一番の生産力を誇り、森林依存の経済だった。しかしその後、山に伐る木がなくなり、ダム建設のような土木工事もなくなり、夜逃げの町と言われた。
- ・ 1967年、森を伐るといふ話が出たとき、住民は期待したが、郷田氏は反対して「森に依存しない町づくりのための戦い」が始まった。
- ・ 1984年、綾町の山の裏側から国有林を伐採して林道を通す計画が発覚した。それを知った綾町の人々や県内の有識者たちが森林伐採に反対し、私はその動きの中で綾町に引きこまれ、現在に至っている。
- ・ 2005年、100年先を見据えた計画として森の復元のプロジェクトが始まった。その後、毎月開催される綾の照葉樹林プロジェクト（以下、「綾プロジェクト」という。）の会議の中でMAB\*計画やBR\*に関する話題が提供された。やがて「綾の自然と共生した地域づくり」、「多様な主体参加のプロジェクト」、「貴重な照葉樹林の保護担保と人工林から照葉樹林への復元に向けた100年かけでの取組み」を世界基準で評価してもらえる絶好の機会等々があった。そして、ユネスコエコパーク登録を目指し始めたが、申請時に移行地域\*については何もデータがないという実態が分かってきた。そこで移行地域を中心にBR予定域全体の生物相を調べ、自然環境基礎データベースを作り、それを基に地域戦略を作ろうとなった。その結果、やがて国内外から関心を集めるようになった。

### ② 1965年～

- ・ 綾町には独自の「自治公民館制度」という

ものがある。綾町が経済的に苦しく貧しかった1960年代半ばに、前々町長であった西田氏が提唱したものである。貧しかった時代の地域の助け合いの制度や、その精神（結いの心）、その文化を見直したいとの思いから制度化された。22地区において数百人単位でミニ自治体を作るようなもので、現在でも重要な役割をもって機能している。

### ③ 1965～1983年

- ・ 森を伐採しないで地域づくりをするにはどうすればよいか。郷田氏が勉強した結果たどりついたのは「生物は誕生してから近代文明が誕生するまで脈々と命をつないできた。しかし、近代科学は諸々の問題を生み出してきた。自然を大事にすることで、課題が解決できないか」という考えであった。
- ・ 人が究極的に求めるのは命であり、健康の要は食である。そのためには安心・安全な健康野菜づくりが最も重要である。無農薬で健康になれば医療費もかからずに健康は取り戻せる。貧しい綾町から脱却するにはまずはこのことから始めるべきと考えた。
- ・ また前町長は「ニーズよりトレンド」を追求することも考えていた。目先の市民の要求に応じるのではなく、先も見据えて動く必要があり、他のところを真似しようとしても、同じことができるようになった頃には、真似しようとした先はもっと先に行ってしまう。それでは永遠に追いつけることになり貧困は解決できない。
- ・ 綾町には、金はないけど広い庭や畑がある。そこで、無農薬で有機肥料を使った健康野菜づくり（健康野菜づくりと一坪菜園運動）を提唱した。「綾町の野菜を食べる綾町の人には健康で長生き！」と評判が広がれば、綾の農産物が売れるはずと考えたからである。その後、町全体で有機農業の循環システムを作った。

### ③1984～2004年

- ・ 例えると「照葉樹林の価値の再認識 伝統と科学知のコラボ」といえる時代である。伐採問題が再燃し、前回は郷田氏が孤軍奮闘していたが、時代が変わり人々の環境意識が高まっていた。大学の先生等、色々な人が応援に来てくれた。
- ・ 綾町の山は雑木山であるため価値がなく、役に立たないように見えるが、価値あるものにするためにはどうしたらよいかを議論した。その結果、文化論にたどり着いた。人は自然を利用しながら生きてきて、文化を作ってきた。生命の基盤は森である、ということである。文化論シンポジウムには著名なシンポジストも招集できた。
- ・ この頃から照葉樹林という言葉を使いだしたが、照葉樹林という言葉は学会では使われていたものの、国内のマスコミには定着しておらず、一般には普及していなかった。

### ④2004年～

- ・ 世界が大きく変化し、林野庁も方針を大きく変えた。これまでは森林伐採を行政が進め、住民が反対してきたが、2004年頃から構図が逆になった。このことから、官民協働の森づくりが動き出した。
- ・ 2005年から綾プロジェクトが発足し、林野庁九州森林管理局、宮崎県、綾町、(財)日本自然保護協会（以下、「自然保護協会」という。）、てるはの森の会の5者による協定を締結した。
- ・ 自然保護協会や大澤雅彦先生（自然保護協会の当時の理事、現在は顧問）も交えて会議を重ねるうちに、綾町の取組が世界的に優れた価値があるのだと認識できた。しかし、有機農業を中心とする地域づくりは近年どこでもやってきているので、綾らしい新しい取組はないかという意見が出るようになってきた。そのようなこともあり、世

界基準で評価してもらおうという気運が高まったため、ユネスコエコパーク申請へ向けた取組が始まった。

- ・ ユネスコエコパーク申請に必要な3つの条件は、「優れた価値ある自然の存在」、「森林等の保護担保措置」、「持続可能な地域づくり」である。綾プロジェクトでは半世紀にわたる地域づくりの経験の蓄積があり、綾はすべての条件を満たすと考えた。
- ・ 定款が定める3つの機能には、「生物多様性の保全」、「学術研究・教育・研修等の支援」、「持続可能な社会と経済の発展」とあるが、綾町が一番弱いのは学術研究・教育・研修分野であり、この部分は大学との連携により世界基準を目指した改善を図った。
- ・ 定款が定める3つの土地利用区分、運営体制といった条件を考えて進めた。緩衝地域\*は公有林地であり、ユネスコエコパークの面積を決める際も5者で決めた。
- ・ 共同で使用できる基金のようなお金があるわけではないので、それぞれの土地の施業管理については土地所有者が自分で費用を受け持った。これは、各主体の経営基盤が強くないとできないことである。
- ・ 地方自治体によるユネスコエコパークのゾーニング\*設定に際しては、日本では前例が無いこともあって、国や県側が各種事業制限の発生等をおそれ、合意に至る協議は難航した。しかし現在、綾町が先鞭をつけたことがきっかけとなり、ユネスコエコパークの取組は只見町や南アルプス市でも進められた。
- ・ 綾町では申請に必要な移行地域に関するデータがなかったので、その地域を林野としての申請ができなかった。そこで、環境省助成（生物多様性保全推進交付金）により基礎調査を始めた。調査では14項目について行い、遠方からも専門家を呼んだが、ほ

- とんどボランティアで生物相を調べ上げた。
- 生物相の調査結果から絶滅危惧種の分布等が分かってきて、それらの情報をもとにして地域戦略を作成した。地域戦略はユネスコエコパーク申請に必要なだったので、切羽詰まって作るようになった。

#### <綾町生物多様性地域戦略の策定>

- 最初は地域戦略を策定するためのノウハウがなかった。自然保護協会にお願いして地域戦略を学習し提案してもらいながら、NPOを中心に計画を練り始めた。
- 自然環境基礎調査の結果からホットスポットが見えてきたため、ゾーニングへ活用した。町民が意識する地域の自然の重要スポットは、日常的に触れ合っている濃さがあることかなのか、道路沿いに大事だと思う自然があることが分かった。
- 地域戦略の中で、生物多様性再生予定区域を設定し、消滅する生物を集めて地域の人に見せることを検討した。具体的には役場の裏にビオトープとして再生した。その際は、古環境の変遷をボーリングによって調べた。

#### <その後の展開（2015年～）>

- 地域戦略を核として、次に挙げるような様々な取組や計画が動き出した。
- ① 自治公民館（地域コミュニティ）での取組
  - 持続可能な自然共生社会に向けた自然環境の保護と保全の取組を行っており、移行地域での様々な自然環境を生かした市民活動である。
  - 地域コミュニティのリーダーである各公民館長に熱意の差はあるが、それぞれ色々な冊子、地図を作っている。このことが地域を見直すきっかけとなっている。
- ② 景観計画 改訂計画（2015年）

- 地域戦略を柱としており、そのまま取り入れたところもある。

#### ③ 綾町第7次長期計画（2016年）

- 勉強会の実施等、色々なところで地域戦略の考えを取り入れている。

#### ④ ユネスコエコパーク管理運営計画（2016年）

- 地域戦略を柱としており、同じ文言を使っている。

#### ⑤ 森林関係検討会 森林整備計画

- 綾町らしい、ユネスコエコパークらしい森林を作る計画である。以前なら行政は計画を作ったらそれで終わりであったが、今回は九州森林管理局から提案があって進めることになった。
- 原案を作ることになったが、横断的な取組をする場合、コーディネートする立場の人がいないと機能しない。
- 針葉樹林を広葉樹林にもどす取組があり、スギを伐採して広葉樹を植えて将来の森づくりへの期待を高めるものである。
- 有機農業中心の畑では自然と共生するべくゾーニングの見直し検討も検討している。自然を利用した有機農業は花粉を媒介しているニホンミツバチに支えられており、それがブランドになっている。

#### ⑥ 森林関係検討会 森林整備計画

- 都市計画マスタープランも地域戦略を使って検討中である。

#### <ユネスコエコパークの取組>

- ・ ユネスコエコパークでは取組体制に条件がある。地域経済と社会の学術審議、生物多様性の保全と管理、教育・学術的研究支援の3つが機能しないといけない。
- ・ 活動は地域戦略を核として広がっているが、総じて財力、マンパワーが不足している。実際にプロジェクトを動かしているのは役場でなく民間の力である。これまで強いリーダーシップのもと運営されてきたため、役場職員が「強いリーダーシップの言ったことを聞けば」という意識を持つようになってしまっているのが問題である。多様な外部主体との連携により外部の力を取り込む必要がある。

注) 文中の\*については、ユネスコエコパークに関する用語の略語のため、以下にユネスコエコパークについて総合的に解説する。

ユネスコエコパーク（通称。正しくは生物圏保存地域：BR）とは、1976（昭和51）年にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が開始したユネスコの自然科学セクターで実施される「ユネスコ『人間と生物圏（MAB:Man and the Biosphere）』計画」における一事業である。

本事業で登録された地域のことを、一般に生物圏保存地域（BR：Biosphere Reserve）と呼ぶが、BRにより親しみをもってもらうために、日本国内ではユネスコエコパークと呼ぶことが日本ユネスコ国内委員会で正式に決定された。登録地域は核心地域、緩衝地域、移行地域の3区分に指定（ゾーニング）される。

なお、「ユネスコ『人間と生物圏（MAB）』計画」とは、生物多様性の保護を目的に、自然及び天然資源の持続可能な利用と保護に関する科学的研究を行うユネスコの政府間事業である。

#### 参考

文部科学省ホームページ

<http://www.mext.go.jp/unesco/005/1341691.htm>、

〈最終閲覧日：平成29年3月15日〉

綾町役場ホームページ

<http://www.town.aya.miyazaki.jp/ayatown/project/mab.html>

〈最終閲覧日：平成29年3月15日〉

## 【「生物多様性の保全に関する研究会」グループ研究成果発表】

各グループの代表が、今年度グループワークの成果概要を発表した（資料 8-2-1）。その後、基調講演の講師 2 名より講評を頂いた。

### ■発表題目

- ・ ①・②グループ（八王子市・青梅市・あきる野市・日の出町・檜原村）  
「新しいエコツーリズム・グリーンツーリズム」
- ・ ③グループ（瑞穂町・武蔵村山市・町田市・日野市・東大和市・東村山市・多摩市・稲城市）  
「東京ブルー（外来種）マップの作成」
- ・ ④-1 グループ（新宿区・豊島区・練馬区・武蔵野市・小平市・清瀬市・東久留米市）  
「つなげる武蔵野生生態系ネットワーク」
- ・ ④-2 グループ（目黒区・世田谷区・府中市・昭島市・調布市・小金井市・国分寺市・国立市・狛江市・羽村市）  
「東京の生物多様性ブランド発見」
- ・ ⑤グループ（千代田区・港区・文京区・品川区・大田区・北区・荒川区・板橋区）  
「まちの生きものしらべ（教育ツール）」
- ・ ⑥グループ（中央区・江東区・足立区・葛飾区・江戸川区）  
「防災・減災と両立する生物多様性」

### ■講評

〈星野氏〉

- ・ 第 3 回研究会の時に学生と一緒に見学させていただいたが、市民の目線から課題を考えていることを感じた。今回、積み上げた成果は素晴らしいと思った。
- ・ ①②グループの発表では、御岳山の自然が魅力、歴史を繙く文化的にもいろいろなものが発掘できそうだと感じた。
- ・ 外来種のマップ等、マップ化することが重

要というのは、話の中から出てきたのではないか。

- ・ 防災に関しては、今ではグリーンインフラという考えも出てきて、これからは重要な施策につながると思われる。

〈河野氏〉

- ・ 自治体職員がこれだけの取組をされていて素晴らしい。フリーの臨時職員は関心を持って取り組むが、正規の職員はなかなかそういかない。
- ・ 全体的に言いたいことは、取組をしても地域に広がりがないのがいつも問題となることである。
- ・ 綾町では生物多様性がなぜ大切なのかということと、健康、経済、地域の文化・歴史とのつながり、生物多様性を大切にしないと将来危険な状態になるということをテーマとしている。
- ・ ここで健康に幸せに生活するには、今の生物多様性の状況を調べて、地域の取組に活かすようにしなければならない。
- ・ その上で、子供たちや年代を越えた人たちが参画できる仕組みづくりが必要である。
- ・ 地域の人々が関心を持って参加できるいろいろなプログラムを用意することと、一番肝心なのは地域の経済活動を動かすようになれば地域が変わること。
- ・ 経済を優先して動かした方が、地域の人を動かすのに一番効果的である。そういった視点で取組をしてほしい。
- ・ 動物が自治体を越えて移動する発表があったが（カワセミの例 ④-1）、そういった視点が重要だ。
- ・ その地域で宝物を利用してという考えは重要だが、異なった取組と連携すると新たな取組が展開する。

### ■質疑応答 特になし

<p>①②グループ</p> <p>八王子市(SL)・青梅市(L)・ あきる野市・日の出町・ 檜原村</p>	<h3>1. 地域の概況と課題</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>山地の地形区分を有しており、生物多様性の恵みを直接的に十分受けている地域</li> <li>ただし、それらの恵みを維持していくための担い手が不足している(高齢化→耕作放棄地の増加)</li> <li>担い手不足や農林業衰退の課題を解決する方策の一つとして、今ある資源を新しい視点で活用し、ブランド化する必要がある</li> </ul> <p>➤ 研究テーマ</p> <p>新しいエコツーリズム・グリーンツーリズム</p>
<h3>2. 検討の流れ</h3> <p>➤第1回研究会 地域の現状と課題から、前提条件の確認を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>共通項(この地域ならではの特徴)             <ul style="list-style-type: none"> <li>【教育】自然体験学習ができる(都心の子供を対象に)</li> <li>【観光】メジャーではなくても良い場所を紹介(「多摩らしさ」)</li> <li>【交通】駅から近い観光地(車は不要)</li> </ul> </li> <li>あるべき姿(ツーリズムで実現したい目標)             <ul style="list-style-type: none"> <li>お金以外のものを地域に残す(体験→労力の提供)</li> <li>公共交通機関の活用(渋滞の緩和)</li> <li>寄り道してもらう(周辺にも関心を持ってもらう)</li> </ul> </li> </ul>	<p>➤第2回研究会 地域の特徴を活かした「生物多様性ツーリズム」のガイドラインを検討した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多摩地域に残る東京都の魅力を伝えられる</li> <li>多摩地域を好きになってもらえる</li> <li>自然を体験して学ぶことができる</li> <li>訪れた人が地元とのふれあいを感じることができる</li> <li>公共交通機関で簡単にアクセスできる</li> </ul>
<p>➤第3回研究会 ガイドラインに基づき、具体的なモデルプランの検討を行った。</p> <p><u>「御嶽駅～御岳山～武蔵五日市駅」ルート</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>テーマ 御岳山と秋川溪谷で感じられる多摩の自然を味わう旅</li> <li>所要時間 9時～17時(合計:8時間)</li> </ul>	<h3>3. 今年度の成果</h3> <p>➤ モデルプラン「御嶽駅～御岳山～武蔵五日市駅」ルート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>御嶽駅(9:00)</li> <li>↓</li> <li>御岳山周辺 御岳ビジターセンター 御岳山ロックガーデンなど</li> <li>↓</li> <li>秋川溪谷周辺 石舟橋 瀬音の湯</li> <li>↓</li> <li>武蔵五日市駅(17:00)</li> </ul> 
<h3>4. 来年度の予定</h3> <p>➤ 別ルートの検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ガイドラインに基づいた別ルートを検討する</li> <li>宿泊の有無や対象とする客層など、条件を設定してモデルプランを再検討する</li> </ul> <p>➤ 仕組みづくりの検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>多くの人に多摩方面へ足を運んでいただくために、自治体連携で取り組むことのできる仕組みづくりを検討する</li> </ul>	

## ③グループ

瑞穂町・武蔵村山市(L)・  
町田市(SL)・日野市・東大和市・  
東村山市・多摩市・稲城市

## 1. 地域の概況と課題

(共通環境基盤)

- 多摩丘陵と狭山丘陵
- 雑木林、谷戸、果樹園等農地
- 里山の環境と伝統文化

(課題)

- 外来生物の侵入、獣害
- 開発(宅地化等)による生物の生息  
生育環境の分断化、農地の減少、
- 多様な主体との連携体制がないこと



➤ 研究テーマ

東京ブルー (外来種) マップの作成

## 2. 検討の流れ

➤第1回研究会  
「アライグマ」「オオキンケイギク」を対象として  
地図化するのを決定。

**【選定理由】**

- アライグマ
  - 広域での連携が必要(地図化する意義)。
  - すぐには対策は取りにくい、自治体の今後のリスク管理として把握しておくことが重要。
- オオキンケイギク
  - 誰でもすぐに対策をとることが可能。
  - 対策をとった効果が見えやすい。

➤第2回研究会  
グループメンバーから集めた情報を試作版として地図化したものを確認し、広域的に情報を集めるための方法を検討

- アライグマ
  - 情報の収集方法や目的が異なると一枚の地図では扱いにくい
  - 都の防除計画に基づいて防除を行っている情報をベースにして、参加自治体から情報を募る。
  - 地図の空白地帯が情報なしなのか、生息なしなのか、注意書きを添える。
  - 連携の可能性を視野に入れた、現場マニュアルにも使えるものを目指す。
- オオキンケイギク
  - 自治体による積極的な駆除対策はほとんど行われていない。
  - 情報が少ない。
  - 人への被害も及びにくい、苦情が少ない。
  - 第3回研究会以降に、統一したルールで情報を集めるための要領を作成し、新たに情報を集めることを検討する。

➤第3回研究会  
アライグマについて参加自治体から提供されたデータを地図化し、空白地帯についての対策と活用方法を検討。オオキンケイギクの情報収集方法を検討。参加自治体全体アンケートの確認。

**1 アライグマ**  
参加自治体からの情報提供を地図化。  
→現時点で得られる情報の地図化に過ぎない、マップに参加自治体に見ていただき、情報の有無を再確認、精度をアップさせる。  
→自分たちの自治体も何かしなければならぬ意識付けになる。近隣自治体と歩調をあわせるきっかけにもなる。

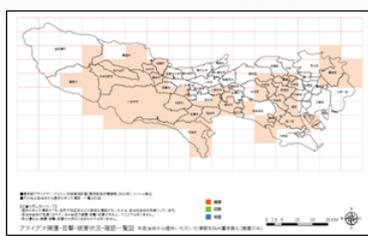
**2 オオキンケイギク**

- 情報が集まらない＝オオキンケイギク自体が認識されていない。
- まずは、オオキンケイギクが外来生物であることを認識させることが重要。
- 知識のボトムアップを図るため、普及啓発ポスター(版)を作成することを平成29年度以降検討。

アンケート結果→ **グループ研究として地図化を行うことは意義がある!**  
・多くの自治体が情報を何らかの形で蓄積しているが、地図化や他部局との共有なし。

## 3. 今年度の成果

➤ アライグマの捕獲・目撃・被害状況マップ(平成29年度2月時点で得られた情報)と地図化にあたっての課題



<地図化に当たっての課題>

- ★精度がまちまちである
- ★市区町村単位で提供のあったデータ
- 全地に色塗り?
- ✓町会単位でのデータ→全地に色塗り?
- 全体に生息するかのように見える
- ✓住所一掃等は特定できるが、個人情報等で問題
- ★色塗りされていない地域に絶対に生息していないとは言えない
- あくまで発見地の情報の集まりを見るにすぎない。

## 4. 来年度の予定

➤ アライグマのマップの精度向上

- ・現時点でのマップを研究会参加の全自治体に確認してもらい、精度を向上させる。

➤ マップの活用方法、外来生物対策方法の整理

- ・マップを活用してもらうための方法例や対策方法を整理する。

➤ オオキンケイギクについて危険性を伝える資料作成

- ・危険性が伝われば、情報は自然と集まる
- ・まずは「知ってもらうこと」を目指す

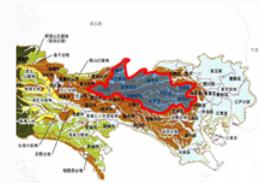
## ④-1グループ

新宿区(SL)・豊島区・練馬区・  
武蔵野市・小平市・清瀬市(L)・  
東久留米市

## 1. 地域の概況と課題

(共通環境基盤)

- 武蔵野台地、植生(雑木林)
- 街路樹(青梅街道等)
- 水系(玉川上水、黒目川、空堀川、神田川等)



(課題)

- 都市化、宅地化の進展
- 消失した身近な自然の再生

➤ 研究テーマ

つなげる武蔵野生態系ネットワーク

## 2. 検討の流れ



➤ 第1回研究会

「水と緑の軸で生きものハビタットのネットワーク化」を検討⇒軸を「カワセミ」に決定

理由1

- ・良好な水辺のシンボリックな鳥として、多くの人に興味を持ってもらえる

理由2

- ・行動範囲が数km(繁殖期)~20km程度
- ・繁殖地、採餌地、ねぐらが分散

➤ 第2回研究会

「軸とするカワセミに関する情報の共有とベースマップへの重ね合わせ」を検討

1 基礎情報の収集

基盤情報:がけ(繁殖)、水域(採餌)、緑地(ねぐら)  
目撃情報:繁殖、採餌

2 ベースマップ作成

情報空白地帯や生息域拡大エリア等の抽出

➤ 第3回研究会

「多様性戦略策定ツールとするための方向性」の再確認及び共有

1 広域連携の検討(案)

(例)協議会方式、WEB上での情報共有

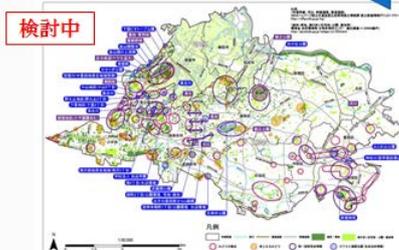
2 地区内施策の検討(案)

(ハード) 生息地の保全・整備  
(ソフト) 観察会、広報、モニタリング調査

## 3. 今年度の成果

➤ テーマの確定、成果のイメージ

「カワセミ」を軸に、  
水系ごとの保全  
マップを作製



## 4. 来年度の予定

➤ 情報の追加・充実

- 各自治体で、再度情報を掘り起こし、追加
- 「野鳥の会」からの情報、その他の情報も収集し、充実化

➤ 施策検討の方向性、成果の使い方

- 水系ごとに、連携した施策および体制を立ち上げ
- カワセミ、水辺、緑地などの歴史性、文化等も考慮  
→ 暮らしや経済活動に繋がられるか
- グループ成果の施策への組み込み
- それらの自治体間への普及方法を検討

## ④-2グループ

目黒区・世田谷区・府中市・  
昭島市・調布市・小金井市(SL)・  
国分寺市(L)・国立市・狛江市・  
羽村市

## 1. 地域の概況と課題

- 武蔵野台地にあり、国分寺崖線や立川崖線、崖線由来の湧水や野川、多摩川など、緑と水が連続する環境の残る地域
- 伝統的・近代的な土地利用や文化が共生
- 課題は、多く存在する地域資源を、どのように魅力として発信するか

➤ 研究テーマ

東京の生物多様性ブランド発見

## 2. 検討の流れ

➤ 第1回研究会

- 「地域資源の共有とパンフレットイメージ」を検討
- グループの各自治体が所有する情報を共有
  - 情報をカテゴリーに分けて整理
  - 既存のパンフレットにより成果イメージを検討
- ⇒ グループに共通する「地形」や「水系」を背景とし、それを基盤として発達してきた文化や食などの要素を載せたパンフレットとすることに決定

➤ 第2回研究会

「パンフレットの構成」を検討

- 共通の特徴である地形や水系を地域固有のブランドとして捉えることを検討・議論  
⇒ それを基盤に成り立つ地域資源を一覧するパンフレット  
⇒ 地形・水系はマップで表現してつながりを見せる
- パンフレットの対象を検討  
⇒ 対象は地域住民とし、「生物多様性」を主観的に捉えられるわかりやすい言葉を切り口に

➤ 第3回研究会

「パンフレットの最終形と伝える工夫」の検討

- 生物多様性ブランドを感じられる工夫の検討
  - グループの地理的特性が“伝わる”マップの工夫及びパンフレットの切り口の検討
- ⇒ 生物多様性が生活と直結した「日常の中にある」ことを伝え、もたらす恵みを「生物多様性ブランド」として「理解」「共感」が進むように内容を構成する
- ⇒ A4サイズ12頁のカタログブック形式  
⇒ 切り口をわかりやすい6つの表現に決定

## 3. 今年度の成果

➤ 地域資源(魅力)を伝える工夫、成果のイメージ

## 4. 来年度の予定

➤ 情報の追加・充実

- 設定した切り口にあった情報のさらなる掘り起こし
- パンフレット前段部分(生物多様性について等)の充実
- パンフレットのレイアウトのさらなる工夫

➤ 施策検討の方向性、成果の使い方

- グループ外の自治体の範囲における地形や水系ごとに連携した情報発信方法の検討
- グループ成果の施策への組み込み
- 既存施策を情報発信ツールへ組み込み

## ⑤グループ

千代田区・港区・文京区  
・品川区・大田区・北区  
・荒川区(SL)・板橋区(L)

## 1. 地域の概況と課題

### 地域の概況

- ・武蔵野台地から低地に分布する都市部
- ・まちの中で実施する生きものしらべを検討

### 課題

- ・生きもの調査は関心がある人が中心で、関心のない人を巻き込むツールがない
- ・生きものは行政の管轄を越えて移動しており、自治体間で連携できるような調査が必要

### ➤ 研究テーマ

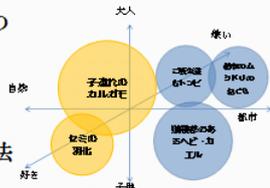
まちの生きものしらべ (教育ツール)

## 2. 検討の流れ

### ➤ 第1回研究会

「対象種の選定・報告方法」を検討

- ・生きものしらべの対象種  
⇒「無害な」嫌われ生きものや好まれる生きものを対象
- ・対象地域  
⇒身近なまちの中の緑
- ・報告方法  
⇒若者が参加しやすい方法 (you tube, Instagram, 生きものログなど)



### ➤ 第2回研究会

「対象種の選定・報告方法」を検討

- ・生きもの対象: オオキンケイギク (外来生物)、ムクドリ (嫌われ生きもの)
- ・生きもの調べのしくみ: 生きものログ (環境省)
- ・課題: データの信頼性、継続性、人材活用

### ➤ 第3回研究会

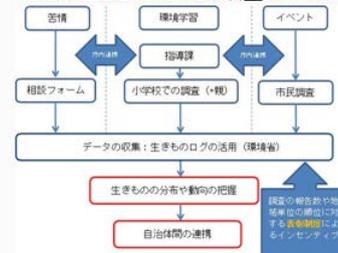
「まちの生きものしらべ」ツールのたたき台づくり

- ・多様な世代を対象とした調査
  - ① 区民からの苦情からの相談フォーム
  - ② 環境学習における小学校の調査
  - ③ 区のイベントを活用した市民調査
- ・生きものログ (環境省) の活用
- ・インセンティブの付与 (表彰制度)
- ・インプットにおける庁内連携とアウトプットにおける自治体間連携

## 3. 今年度の成果

### ➤ テーマの確定、成果のイメージ

「まちの生きものしらべ」の調査フレーム



## 4. 来年度の予定

### ➤ 情報の追加・充実

- ・「まちの生きものしらべ」を生きものログでの実施
- ・環境情報の地図化 (街路樹: ムクドリ, 自然裸地: オオキンケイギクなど)

### ➤ 施策検討の方向性、成果の使い方

- ・「まちの生きものしらべ」を介した庁内連携
- ・自治体間で連携した対策や取組の検討

## ⑥グループ

中央区・江東区・足立区  
葛飾区(SL)・江戸川区(L)

## 1. 地域の概況と課題

- 荒川・利根川水系の低地に位置する地域
- 食文化や産業など、水辺が地域の特徴に深く関係
- 人口が集中し、防災機能の強化が課題
- 水辺の自然環境保全と相反するかたちで整備されてきた防災施設

➤ 研究テーマ

防災・減災と両立する生物多様性

## 2. 検討の流れ

➤ 第1回研究会

「水辺の生物多様性に配慮した事例を収集」  
「防災と生物多様性の関係の考え方を検討」

- 自然にも配慮した施設の再整備により、自然と人の関わりを再構築する
- 水辺の生態系ネットワークの機能を高めていく取組の中に防災施設の再整備も含める

⇒ 「広域的な水辺の生態系ネットワークを把握できる事例マップ・事例集」を作成

➤ 第2回研究会

「事例マップ・事例集のまとめ方・見せ方を検討」  
● 各自治体共通の取組情報を収集＋現場の写真  
→ 親水公園、親水緑道、親水護岸等



亀島川緑道(中央区)



横十間川親水公園(江東区)



曳舟川親水公園(葛飾区)



榎田堀親水緑道(江戸川区)

➤ 第3回研究会

「施策展開に向けた課題を洗い出す」

課題1: 生物多様性のことを長期的視点でとらえていく考えを地域の人達に伝え理解してもらうことが難しい

⇒ 事例マップに標高データや浸水ハザードマップ等を重ね、土地本来の基礎的なポテンシャルを区民にわかり易く伝える など

課題2: 親水公園や高水敷の緑化などが、どれほど生物多様性に効果があるのかわかっていない

⇒ 地域ならではの指標種を決め、事例地を対象にモニタリング調査を実施、確認状況を事例マップ上に示し、生態系ネットワークの状況を把握する など



## 3. 今年度の成果



## 4. 来年度の予定

➤ 情報の追加・充実

- 事例のカテゴリ区分の見直し  
(整備のピフォア・アフターの状態がわかる整理)
- そのほか追加できる情報があれば検討し、内容を充実

➤ 施策検討の方向性、成果の使い方

- 成果や課題を踏まえ、施策・取組の方向性を検討
- 今年度成果を使った具体的施策・取組案を検討

